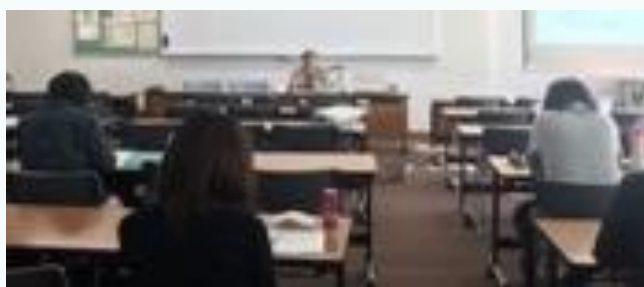


# 研修会報告

## 滋賀支部 2019 年度地域専門職活動交流会

### ① 学校における緊急支援：支援プログラムの様々な形 ——滋賀県の取り組み——

講師の鈴木葉子先生(滋賀県スクールカウンセラースーパーバイザー)の研修を受けている間、歌手・平原綾香の「ジュピター」の一節「ひとりじゃない・・・♪」が想起され、ずっと頭から離れませんでした。東日本大震災の直後、多くの人々からリクエストされた名曲です。この日の研修テーマ「学校における緊急支援」を発案したのは4月。実現に至るまでに8ヶ月以上経っていましたが、その8ヶ月の間に自分が働く教育現場で「学校における緊急支援」を体験し、現場の同僚たちと力を合わせて乗り切ってきました。臨床経験は20年以上と、もはや決して初心者ではなく、緊急支援に関する研修も幾度となく受けてきて、現場では自分も他職種と力を合わせ、状況に応じて関係者に情報提供を行い、当事者のカウンセリングを行う立場でした。しかし、事故、災害、自死・・・といった「非日常の出来事」に対する対応は、しばしばマニュアル通りにはいきません。近年、日本では幾度となく災害が起こり、「緊急支援」はもはや心理職が専門性を活かして関わる重要な分野となりつつあります。しかし、実際に「非日常の出来事」が起こってしまい、関係者の多くが傷つき、時には疲弊しきっている中で冷静さを保ち、専門性を発揮してケアに当たる作業は、やはり色々な意味で多くの労力を必要とします。ネット社会の現代、「緊急支援/心理職」で検索すれば、沢山の情報を得ることができるものの、突如として「非日常の出来事」が起こった現場は本当に生々しく、波及して様々な出来事が生じてきます。ネットで最新の情報を得ておくことも大切ですが、生きた人間をケアしていくためには、やはり幾多の実体験をお持ちの先生に直接教わるのが大切であると、今回の研修を受けた私は心から実感しました。そして、研修を受けている最中、長年に渡り滋賀県の緊急支援を担ってこられた鈴木先生のお姿に触れ、「ひとりじゃない・・・♪」という勇気が湧いてくるのを感じていました。



講演前半では、心理職による緊急支援のプログラムについて、詳細にお話していただきました。心理職が緊急支援を行うために現場に入っていく時は、正確な事実関係の把握をしておくと共に、対応に関する学校での決定事項(あるいは検討事

項)などをしっかりと押さえておかなければなりません。今年度いくつかの緊急支援に関わった後に、改めて緊急支援の「骨子」となる考え方を再確認することができました。事故や災害など「非日常の出来事」が起こったからといって、現場に（いわば土足で）踏み込んではいけません。ともすれば冷静さを失いがちな状況であるからこそ、緊急支援特有の「流れ」を踏まえながら動く重要性を学ぶことができました。

講演後半では、鈴木先生が実際にご経験された緊急支援の事例について詳細にお話くださり、前半の講演内容が、よりリアルに、臨場感を持って伝わってきました。印象に残ったのは、緊急支援の関係者に対する鈴木先生の中に沸き起こった思い（感情）などを、とても正直に開示してくださったことです。また、最初は支援に対して必要性を感じなかった方に対して、もちろん支援を押し付けるのではなく、なぜ必要性を感じないのか、というところを冷静かつ客観的に振り返っておられたことも印象的でした。最終的に、その方は支援に対する考えを（受けても良いものとして）変えたとのことでしたが、相手がなぜ支援を拒んでいたのか、その背景にあるものが何なのか、しっかりと考えながら、その時々で可能な支援を地道に行っておられた専門職としてのご姿勢がとても印象的でした。ベテランの先生でいらっしゃるからこそ、マニュアル通りではなく、自らの感情や対象者の気持ちに思いめぐらせつつ、柔軟かつ臨機応変に動かれることで、質の高い緊急支援が可能になっているのだと感じました。

臨床発達心理士も、様々な立場で「緊急支援」に関わる機会があろうかと思います。実際、グループワークでは教員の立場で、または生活者の立場で経験したご自身の事例を振り返る方が多くいらっしゃいました。ご経験豊かな鈴木先生から学ばせていただいたことで、今後の対応により一層の幅が出てくることでしょう。今回の研修は、内容的にハードではありましたが、きっと全ての参加者にとって非常に有意義な3時間であったと思います。この場を借りて心からの御礼を申し上げます。鈴木葉子先生、本当にありがとうございました。

日本臨床発達心理士会滋賀支部